



NETWORKING NEWS LETTER



CONTENTS

【特集】

ねっとわーきんぐレポ 思いっきり遊んだ 夏の3日間！

キッズウィークエンド@青梅6

地球と一緒に…つくる人TALK[その10]
日本の農業、納豆で応援！
登喜和食品 遊作 誠さん

【トピック&ニュース】

キッズウィークエンド@青梅6

311から3年半。

9.13さよなら原発
エネルギーシフトウォーキング16

武藤類子さんのお話会
「福島を聞く」@埼玉飯能

遺言…原発さえなければ
福島の3年間…消せない記憶のものがたり

【INFORMATION】

事務局からのお知らせ

●10月の活動予定

●活動短報

NEW
STAGE
2014 10月号

思いっきり遊んだ夏の3日間！ …キッズウィークエンド@青梅6

8月22日(金)～24日(日)、原発震災により外遊びや運動に制約を受けている福島の子どもたちを、青梅・奥多摩地域に招待し、思い切り楽しく遊んで英気を養ってもらおうバスツアー「キッズウィークエンド@青梅6 ～福島子ども保養ツアー～」を実施しました

この2泊3日のプログラムは、東日本大震災の翌年、2012年4月から3年6回目の開催となります。青梅ポンプの会が企画・運営し、ポラン広場東京が全面的にバックアップしています

参加者は去年より大幅に増え、福島の子どもたち合計65名とボランティアの皆さん45名、合計110名の大所帯です。山遊び、川遊び、歌あり踊りあり、ヨガも座禅もあって、手づくりのごはんには花火……。思いっきり遊んだ夏の3日間は、心配された雨も降らず、参加者

した子どもたち、そしてボランティアのみなさんの充実した笑顔がとってもステキな3日間となりました

この取り組みは、3日間労を惜しまず手伝ってくださったボランティアの皆さん、品物や場所などで協賛いただいた多くの方々のご協力によって成り立っています。実施の詳細は、子どもたちの感想文や、たくさんの写真と一緒に報告集としてまとめ、ご協力いただいた皆様、ポラン広場東京の会員ほかにお送りする予定です。どうぞ楽しみにお待ちください

●ポラン広場東京ウェブサイト ネットワーキングページでも当日の様態を公開しています。

http://www.polan.tokyo.jp/04_networking/140823_kids6.html





キッズウィークエンド@青梅6 思いっきり遊んだ夏の3日間！

■奥多摩の夏を満喫！

センターのグラウンドでひとしきり遊び倒した頃、ジャンベが鳴り響き「集合」の合図。「踊る、踊る、Moccoly」さんによるアフリカダンスワークショップの始まりです

Moccolyさんは被災地支援も盛んに協力する元気なダンスパフォーマーで、アフリカの太鼓・ジャンベのリズムに、最初は戸惑っていた子どもたちもノリノリに。夕食後には、この日と前日がお誕生日の子3名にお祝いのサプライズ！青梅の天然酵母ベーカリー、アオティアさんからアイシングクッキーのバースデケーキのプレゼントもありました。花火大会も盛り上がりりの一日でした

2日目の午前中はこのツアーの目玉。ラフティングボート体験(高学年)と川遊び(低学年)です。今回は多摩川の激流下りに挑戦！日本代表レベルのインストラクターの協力もあって体制は万全です。子どもたちはヘルメットにライフジャケットの出で立ちで激流に突入！その先でみんな川にどぼーん。プカプカ浮かびながら真夏の涼。大きな歓声、開放感あふれるひとときを楽しむことができました

低学年の子どもたちは多摩川支流の大丹波川に移動し、「中茶屋キャンプ場(奥多摩町)」でのんびり、あるいは大はしゃぎな川遊び。キャンプ場の方々の協力で、ほぼ貸切状態。ライフジャケットを着けるのもそこそこに、川に突進。滝すべり、飛び込み、一本丸太橋渡り、次々に遊びを見つけ、飽きることも疲れることも知りません。



午後はみんなでパスタとトマトソースのランチを楽しんだあと、二俣尾自然体験館で水鉄砲づくりのワークショップ。みんなが竹と木綿の布でつくった大小とりどりの水鉄砲を使ってゲーム、そしてこの日の夕食になるうどん作りも体験。講師は青梅の手づくりそば・うどん「河邊」の店主・河邊さんが引き受けてくれました。前日に南部地粉と平飼卵で仕込んで寝かせた生地を、伸ばして、切って、茹でるまでのひととおりを楽しみました。これにつけ合せの天ぷら、そしてだしの効いたつゆも作って、手づくり天ぷらうどんの完成です

続く夜のアトラクションには、キッズウィークエンドを共催しているアースデイ東京から、ダンスパフォーマンスグループEarthday with Michaelが駆けつけてくれました。スタッフの「子どもたち、MJ 知ってるかな？」の心配を余所に大盛り上がり。最後にはリーダーのマイケルヤモさんにサインを求めて子どもたちが取り囲むほどでした

■お寺で心もやわらいで

そして最終日は、青梅の由緒ある禅寺・黒澤山間修院でのリラックスタイムです。まずは田中正哉方丈よりご指導をいただき、約15分のキッズ座禅体験です。足の合わせ方や呼吸など、初めては難しいものですが、大半の子どもたちが最後まで座っ

初日、福島からバス2台に分乗してきた子どもたちは、お昼過ぎには青梅市の沢井市民センターに到着。早速、広いグラウンドいっぱいに広がってサッカー、竹馬、石垣登り。今回盛り上がったのは、手づくりの青竹筒に水を入れてボランティアスタッフ水浸し遊び…。楽しい3日間が始まりました

ていてくれました。座禅のあとは、青梅最後のフリースタイル。ひろびろした本堂でのキッズヨガや、ボランティアの皆さんの手ほどきでフェイスペインティング、境内で自由に外遊び。終わるころには子どもたちのほっぺやうでなどがお花やロケットや動物の絵など思い思いにペインティングされて、それは楽しそうでした

■また来いよー！

お昼には3日間のプログラムも終了し、ツアーの締めくくりは本堂前に全員集合して記念撮影です。「みんなの感想が僕たちスタッフのがんばりの原動力！」…青梅ブンブンの会代表、星匠さんからの話しも力がこもり、来る時はバラバラだったみんなの息もピッタリ合って、全員がこの旅一番の笑顔に。それは大きな家族のようでした

子どもたちは全員バスに乗りこんで、ボランティア・スタッフ皆でお見送りです。窓から手をふる子どもたち、「また来いよー」「元気でねー」と送り出すみんな。別れはいつだって悲しいもの。どうしてもホロッと来てしまう、そんなシーンのなか、バスはそろそろと動き出して、故郷の福島に帰って行ったのでした



キッズウィークエンドを 未来につなげるために

…こんな「保養の家(仮称)」を創りたい

今、青梅ブンブンの会では、「こんな「保養の家(仮称)」を創りたい」という提案書をつくって、関係の方々への問いかけを始めています。みんなで使えるような滞在型の保養施設をつくったらどうか、という。まだ

未定ですが、いずれの日か、ブンブンやボランティアの皆さんと一緒に、このプランをどういうふうに生かしていくかなど、アイデアを出しあう場を設けたいと思っています(さとう)





日本の農業、納豆で応援！

…登喜和食品 遊作 誠 さん（東京都府中市）

納豆は、大豆そのものの栄養に加えて、多くの保健効果があるとされ、日本の伝統的な発酵食品として親しまれています。その反面、原料を輸入して機械化・大規模化を進めれば、驚くほど安い価格で量産できるのも納豆。そんな業界にあって、産地・農法から製法に至る徹底したモノづくりでファンの多い登喜和食品。代表の遊作誠（ゆうさく まこと）さんにお話を伺いました

■日本の農業を応援したい！

登喜和食品の3代目、遊作誠さんは1949年生まれ、今年で64才になります。誠さんは大学を卒業後、家業を継がず土木建設会社に就職しました。そこで数ヶ月間、東北地方の農家で宿と食事の世話になり、ご主人は出稼ぎ、残された家族を奥様が支えて暮らすという、東北の農家の厳しい現実を目の当たりにしたそうです

この経験から、遊作さんは「日本の農業を応援したい！」と考えるようになりましたが、当時、国内ほとんどの納豆屋さんはアメリカ産の大豆が主流。実家もご他間にもれず輸入大豆です。これでは農家を応援することができない。誠さんは思いを実現するため、大豆を国内の農家から直接仕入れることを条件に、家業の納豆屋を継ぐ決心をしたのです

■わらづと納豆は原点

経木、発泡スチロール製、紙など、様々な容器で店頭に並ぶ納豆。そんな中において、稲わらで大豆を包んだ「わらづと納豆」



は、納豆づくりの原点です。あの稲わらは単なる入れ物ではなく、そこには棲む自然の納豆菌が中身の大豆を発酵させるという、すぐれた伝統の知恵です。製造はすべて手作業で、稲わらの確保も含め、製造できる工場はとてまもなくなくなっています

登喜和食品では、この希少なわらづと納豆を、創業以来65年間つくり続けています。農薬不使用の稲わらを確保し、熱で滅菌、その稲わらに生き残った天然の納豆菌と、大豆に接種した少量の納豆菌によって発酵・熟成させる、とても手間のかかる製法。それでも遊作さんは、この製法を守り伝えていくことも、納豆メーカーとしての役割と考えています。こうして出来る「わらづと納豆」は、その相性良さゆえか、わらの香りと大豆の甘い味わいが絶妙で、まさに別格の納豆です「同じ豆も容器で全部違うんだよ。日持ちも違う。一番持つのがわら。発泡だと常温で2、3日で変化してしまうけれど、わらだと常温1ヶ月たっても変わらない。わらは、保温性だけでなく、納豆菌が安心して休眠できるように環境を変えてしまうようで、そこが不思議なんです」



■家庭の味を取り戻したい

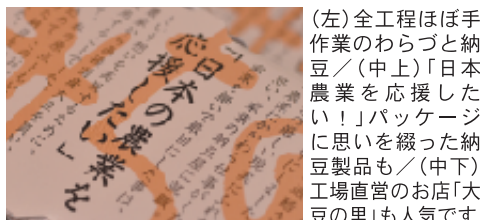
「お米、麦、野菜そしてわらがあれば日本人はだいたい生活できる。そこに納豆があって、海の幸があって、日本の自給自足をまかなってきたのに、最近はどうもズレてきた気がします」

納豆から様々なことを学んできたという遊作さんは、現代の日本人の食生活をとても心配しています

「今一番心配なのは、子どもたちがコンビニの食品ばかり食べ、この先どうなってしまうのかということ。かつてはお母さん手づくりの塩にぎりや、塩っ辛い梅干の美味しさ、家庭料理の原点といえる味わいがたくさんあって、子どもたちはその中で育っていました。和食ブームとか言っているけれど、お寿司でも天ぷらでもなくて、自分たちの世代が、自分たちの普段の食をなんとかしないと終わってしまう。もともと日本にあった家庭の味、がなくなっちゃうんじゃないか、という危機感があるんです」

遊作さんはそんな危機感から、地元の学校給食に納豆や煮豆などを提供する活動を進めています。これからは生産者と加工業者による、配慮が行き渡る「小規模なネットワーク」が大切だといいます。そして、全国各地に今も残る地方品種、地大豆に着目して、との地域の方々とネットワークすることや、そこから地域それぞれの味わいが生きた納豆として商品化したり、

ポラン広場東京とも連携しながら、有機認証にも取り組んでいきたいと、その意気込みを話されていました



311から3年半。再稼動反対！

913さよなら原発 エネルギーシフトウォーキング (18)

昨年4月から開始した「毎月11日に近い土曜日のウォーキング」の18回目。8月に続き、今回も午前中10時スタートで、羽村市神明公園から小作駅近くのけやき児童公園まで歩きました

終了後は、有志で飯能市に移動し、飯能市民会館が行なわれた「福

島を聞く 武藤類子さんお話し」に参加しました。福島に生まれ、今も住み続け、「福島原発訴訟団長」など住民や被災者の人権や健康を守るために奔走していらっしゃる武藤類子さんから、福島原発と福島の人々の「今」のお話をお聞

きし、3・11後の世界をともに生きる想いを新たにしました
*次回19回目の開催は10月4日(土)。いのちや暮らし、そしてかけがえない自然を脅かす巨きな力に負けないよう、私たちの思いを伝え、届ける活動は、これからも続きます



武藤類子さんのお話し 「福島を聞く」

@埼玉飯能

9月13日、埼玉県飯能市民会館にて「武藤類子さんお話し「福島を聞く」」が開催されました。福島県三春町に生まれ、1980年代末より反原発運動に携わってきた武藤さんは、今も福



島に住み続け、住民や被災者の人権や健康を守るための活動に奔走し

ています。今回のお話しは、飯能市で反原発の運動を進めている「原発止めよう飯能」が主催。原発事故から3年半を経過して、マスコミがなかなか伝えない福島原発の実際、そして福島に暮らす人々の「今」を伺い、共有する場として企画されました。市内外から参加した100名を超える市民が、武藤さんが団長を務める「福島原発訴訟団」による東電会長・社長など役員、関係者に対する告訴・告発の取組み経過や、終っていない原発事故の現地報告に、熱心に耳を傾けました



事務局からのお知らせ

引き続き、賛助会員の拡大にご協力をお願いします！

●ポラン広場東京は、2011年施行の「新寄付税制」と2012年4月施行の「改正NPO法」に基づき、「認定NPO法人」の取得を目指しています。●認定NPO法人への寄付には、寄付者への所得税・住民税控除、会社等法人への損金算入枠拡大などの税制優遇措置が設けられました。この「新寄付税制」を活用し、補助金助成金と自主事業収入中心の不安定な資金調達から、会費・寄付金収入を主な資金とする法人運営へと発展さ

せる事がねらいです。●認定取得の主な要件は「年平均100名以上の寄付者がいること」です。賛助会員の年会費(5千円)は寄付金とみなされるので、賛助会員100名以上で要件を満たします。●会の運営の健全化、安定化を万全のものとするため、**賛助会員の募集は今後も進めてまいります。**引き続きご家族、お友達などにお声がけいただき、賛助会員の入会拡大にご協力いただきますようお願いいたします！

活動予定

- 10月4日(土) 10時～11時 さよなら原発 エネルギーシフトウォーキング 羽村市小作～青梅市河辺 (10月のみ 週間早く開催します) 14時～15時 未来をつくる たまごモ 国立市 大学通り 主催 たまごモ実行委員会 *多摩各地域で行動するグループや個人が午前の各地域での行動後に、国立に大集合します

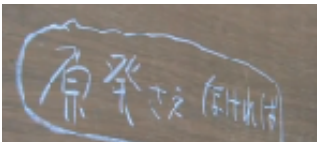
活動短報

- 9月 10 福島二本松 青空市場に義援物品お届け
- 13 さよなら原発 エネルギーシフトウォーキング 18
- 20 福島二本松 青空市場に義援物品お届け

遺言

…原発さえなければ

福島の3年間 消せない記憶のものがたり



『遺言…原発さえなければ』。8月30日、東村山市中央公民館で実施された自主上映会に参加しました。映画はその数日後から始まる、福島県飯館村の酪農家を襲った3年間の苦悩の記録。3時間45分という長編ドキュメンタリーです

前触れもなく降り注いだ放射性物質が、すべてを後戻りのできない状況に追い込んでいきました。牛が、家族が、地域が、じわじわと、ばらばらに引き剥がされていく。事実は淡々と重ねられて、その

果て、ひとりの酪農家が自殺しました。「原発さえなければ…」牛舎の壁に残された遺言が、原発の怖ろしさ、罪深さを訴えかけていました

上映のあと、制作した豊田直巳監督はこのように話していました…「政府は復興というが、映画に登場した長谷川さんご一家は、事故前は4世帯が一緒に暮らしていた。それが今はちりぢりばらばらです。ほかの多くのご家庭もみなそういう状況にある中で、復興などという言葉は虚しい」会場は35名近く方が、終演後の豊田監督のお話まで席を立つことはありませんでした。10月以降も全国での上映会が予定されています。事故から3年半を過ぎた今、その記憶を風化させないためにも、機会がありましたらぜひご覧ください

上映情報はこちら…
<http://yuigon-fukushima.com/>

じむきよく NOTE



8月のキッズウィークエンドが無事に終わり、子どもたちから手紙が、ボランティアからは参加レポートが続々と届いています。参加した子ども家族や、様々なご協力をいただいた方々にお届けする報告書を作成中です。継続的な参加者からの手紙やレポートを読み返すと「キッズウィークエンドは子どもと大人を共に成長させる取り

組みだ」と実感します。毎回、ウェブサイトや報告書に載せる写真の選定に苦勞します。どの子どものシーンもみんな本当に良い顔をしていて、絞り込めないんです。ウェブの更新や報告書の発行が遅れたら、「きっとまた子どもたちの写真を観ながらウルウルしているにちがいない」とご海容のほどを(佐藤)

NPO法人ポラン広場東京 ネットワークニューズレター



10月号

2014年 10月 1日発行
(毎月 1日発行)

特定非営利活動法人 ポラン広場東京
〒198-0052 東京都青梅市長瀬4-393-11
TEL: 0428-22-6821 FAX: 0428-25-1880
E-mail: office@polano.org